

対話イン愛知教育大学 2013 報告書

報告者：針山日出夫



(愛知教育大学・自然科学棟 科学実験室にて)

1. 概要

愛知教育大学での対話活動は2006年以来毎年行ってきており、今年は7回目。愛知教育大学・理科教育講座（吉田淳研究室）が主催者となり、中部原子力懇談会が後援し、5月26日「エネルギー環境教育フォーラム2013」として開催された。参加者は愛知教育大の学生、現役教師、シニア、オブザーバを含め計38名。

福島原発事故の影響による原子力隠避性向や安全規制・事業者への不信などの世論の中、学生達がマスメディアなどからどのような影響を受けているかが一つの懸念点であり関心点でもあったが、エネルギー問題/原子力問題についていろんな角度から冷静で真剣な対話をする事が出来たと感じた。これは担当教授の日頃のご指導と熱心な教育活動に負うところと生徒達の自覚・意欲に依るところ大と考える。主催者・学生・後援者・オブザーバー・シニアの全ての参加者にとって達成感に満ちた対話会であった。

2. 愛知教育大学での対話会の狙いと目的 達成度

この企画は将来初等・中等教育において教師となる教育系大学生を対象とするものであり、主催者の意図は、「エネルギー問題・原子力問題を環境や経済や国際社会などの多面的な視点から考えて、教育に活かす方策を探ること」で

ある。シニアにとっては、我が国や世界のエネルギー・原子力に関する知識・見識を対話を通して直接学生達に伝える機会であり、またこれまでの体験やエネルギーに取り組んできた気概を若者に伝えることが出来る機会でもあり有意義な企画である。

グループ発表での学生達からの共通メッセージは「現在の世論は雰囲気だけで形成されている。正しい知識と理性で考えることが出来る能力を有す子供達を育成していきたい」というものであり目的は十分達成されたといえる充実したものであった。

3. 対話会次第詳細

日時： 平成 25 年 5 月 26 日（日）10 時半～17 時

場所： 愛知教育大・自然科学棟 2F（愛知県知立市）

参加者：（愛教大）吉田教授、遠西先生、学生 21 名（院生、3・4 年生）

（SNW）山崎吉秀、齋藤伸三、中村威、寺澤倫孝、三谷信次、大野崇、若杉和彦、西郷正雄、早野睦彦、針山日出夫

（協力）大津先生/熱田高、羽澄先生/押切小、西谷先生/おしきり小

（支援）中部原子力懇談会・玉越部長、中部電力・牧村副長（広報担当）

配布資料：① 基調講演資料（東電福島事故による住民・環境への影響及び原発の安全強化と我が国のエネルギー需給の課題及び補足資料集、齋藤伸三）

② 原子力コンセンサス 2012（電気事業連合会）

③ 暮らしの中のエネルギー（『フォーラム・エネルギーを考える』事務局）

対話会次第：

10:25-10:40 開会行事 主催者挨拶・参加者紹介

10:40-12:10 基調講演（講師；齋藤 SNW 会長）

① 事故経緯と住民被曝、環境汚染の状況

② 放射線の人体への影響、放射線リスクと他のリスク比較

③ 原子力発電所の安全強化と再稼働条件

④ エネルギー需給の現状と将来課題

【特記事項】 状況全体を俯瞰した内容の濃いプレゼン。冒頭に放射線被ばくやエネルギー自給率などについての質問をして講演への関心を導く工夫あり。

13:10-15:20 SNW シニアとの対話（5 グループに分かれ対話）

グループ A 原発全面停止による影響

グループ B 原発の可能性とリスク

グループ C 放射線の性質・利用と安全性

グループ D エネルギーの将来と再生エネの可能性

	グループE	理科教育、エネルギー教育の在り方
15:20-16:50	グループ別成果発表・質疑、指導講評	(後記参照)
17:00	閉会挨拶	(SNW 山崎)

4. グループ対話の概要

<グループA 原子力発電所の全面停止による影響> 報告者：西郷正雄

1. 参加者

(学生) 佐々木光、豊満潤一、大倉吹雪 大野舞子、酒井雄一、西川俊介
 (教員) 西谷一孝(ほのか小学校—理科教育専攻OB)
 (シニア) 山崎吉秀、西郷正雄

2. 討論、対話の要旨

最初に学生の中より、進行係(ファシリテータ)とPCの取りまとめ担当者および発表者を決め、続いて学生・教員の簡単な自己紹介のもとに、対話会を進めた。

各自、質問内容をポストイットに記載の上、ファシリテータが、それらを下記5つの質問項目に分類し、シニアが個々の質問に応えることで進められた。

- ① 再生可能エネルギー導入の可能性
- ② 原発ゼロ停止による影響
- ③ 原発ゼロで電力供給が可能か
- ④ 現状は、どのように電力を賄っているのか
- ⑤ 火力発電で賄えられと思うが原発は必要か。

回答に当たっては、①～⑤まで、関連していることがあるために、順序としては個々に進めたが、回答は必ずしも個々に応えることにはならず、合わせて答えることになった。

また、途中で本題より離れた質問も飛び交わされたが、大事な内容のためにそれらについても意見交換を行った。

最初は、質問者が3,4人に限定されたために、残り30分程度のところで、全員に発言をしてもらうようにしたので、聞きたい質問については、一応聞くことができたのではないかと思う。 以上

<グループB 原子力発電所の可能性とリスク> 報告者：大野崇

1. 参加者

(学生) 清水和也、鈴木康太、石川壮大、吉岡ちひろ)
 (教員) 羽澄大介(押切小学校教諭主任)(SNW) 齋藤伸三、大野崇

2. 討論、対話の要旨

自己紹介を兼ねて、今回対話会に参加した考えや日頃思っていることを話

してもらい、その後、ポストイットに疑問・質問を書き出してもらい、SNW側から答えた後、意見交換を行った。

学生A 原子力に賛成であるが確たる信念があるわけではない。子供に教える立場から知識を得たい。

学生B：原子力に反対。ただ、子供にどういう立場で教えるかという点で悩む。

学生C：原子力について何も知らない。理解を深めたい。

学生D：放射線は怖いものと感じているが正しく恐れることが必要で理解を深めたい。

羽澄：賛成・反対は子供の判断である。教諭は事実を教える。平成20年に放射線教育の指導要領が決まり23年から教育開始となり、正々堂々と教えられるようになった。これまでは現場では何も放射線について教えてきていない。

質問・疑問（ポストイット内容）

- ・ 子供に対する放射線の影響は
- ・ ベクレルとシーベルト、何を表す単位なのかわからない
- ・ 原子力発電は放射線以外にデメリットはないのか
- ・ 原子力発電がなくなると生活レベルはどうか
- ・ 電力不足の害はどこで出るか
- ・ 廃棄物処理はどうなっているか
- ・ 次に動かす原子力発電はどこか。クリヤしなければならないハードルは？
- ・ 動いていない原発に対しても地震等の対策はなされるのか

内容は誰でも知りたいもので基調講演をベースに補足や裏話を交えて丁寧に説明した。皆、熱心に興味をもって聞き、知識を吸収しようとする姿勢に新鮮さと好感を持った。

これまでなんとなく思っていた原子力への関心が、内容に富んだ基調講演と対話を通し身近に感じてもらったなどの印象を強くした。今回、羽澄先生が現場の経験を後輩に伝える機会にもなり、先生に参加いただけたことは、対話を一層内容濃いものにしたと思う。

今年度から放射線教育が開始されたので正しい知識を普及して行ってもらいたいと切に願う。

以上

<グループC 放射線の性質・利用と安全性>

報告者：中村威

1. 参加者

(学生) 藤田、森、服部、佐久間

(教員) 吉田教授 (SNW) 寺澤、中村

2. 討論、対話の要旨

午前中に行われた基調講演を踏まえ、学生たちが日頃疑問に感じていることや、かつ自分たちが近い将来教壇に立った時に原子力の安全性や放射能、放射線に対してどのように対峙すべきかなどについて意見交換を行った。

その中で福島事故は僅か2年前のことであるが、時間的、地理的なものに加え、目の前の自分たちの問題（教員採用試験）などの方にウエイトが移り、少し風化し始めているのかなという印象を持った。これは現在事故が一段落し、マスコミなどによるセンセーショナルな報道が少なくなってきたことによるものなのか。

しかし、原子力安全という問題以外に、放射線被ばくによる人体への影響、食の安全などについては特に女性たちにとってはいまだに関心事であり、その観点からシニア側から説明などを行った。すなわち、放射線に関する基本的知識や世の中で放射線がどのように利用されているのかなど、放射線の持つマイナスイメージだけでなく、医療分野、産業分野いろいろな場面で放射線の持つ特質を利用したプラス面、また放射線を正しく知ることにより無用の被爆を避けることができるなどについて説明を行ない、少しは理解を深めることができたのではと考える。

しかし、問題は彼らが教壇に立った時に、小中学生たちにどう理解させるか。現行の中学校の理科教科書では、原子力や放射線に関する記述は、ほんの数ページであり、それも理科というよりも社会科的な内容のものでこれでは正しい知識を伝えることは不可能に近く、ここに彼らの苦悩があるのではと感じさせられた。その方策として、教師自らに産業技術の現場、現況を体感させ活きた知識を持ってもらえるようなことも義務づけることもあってよいのではと感じた。

いずれにせよ、技術立国としての我が国が存在し続けるには、正しい知識を持ってもらえるような教育環境、人の育成が重要であると考えます。最後に対話に参加された学生さんたち、吉田教授にお礼を申し上げますとともに今後の益々のご活躍を祈っております。以上

<グループD エネルギーの将来、再生可能エネルギーについて>

報告者：早野睦彦

1. 参加者

(学生) 千賀しほ、立石智也、小比賀正規、長尾尚大

(教員) 大津浩一 (県立熱田高校) (シニア) 針山日出夫、早野睦彦

2. 討論、対話の要旨

学生4名から議論したいことや疑問点を投げかけてもらい、それぞれについて議論を深めていった。主な論点は以下の通り。

- 1) シニアの若い頃はどのような環境であったのか、どうして原子力という職業を選んだのか。(我が国のエネルギーの過去、現在そして未来をどのように考えるか)
 - 2) 原発の安全性を高めるといえるが、その許容レベルはどのように考えているのか。原子力の開発の将来はあるのか。
 - 3) 再生可能エネルギーに限界とその理由は？シェールガスの可能性は？
これらについて
 - 1) (シニアの) 若い頃は水力・火力の時代でありこれからの日本の発展のためには大きなエネルギー源が必要とされ原子力が華々しく登場したという右肩上がりの時代だった。これに対して皆さんは飽和社会に居てこれからどのようにエネルギーを考え選択すべきか、シニアの若い頃に比べて難しい時代にいる。
 - 2) 福島事故を受けて当然ながら原発の安全性を高める必要があるが、世の中絶対安全は存在しないわけで、十分安全でないからと言って原子力を放棄した場合、貧困等の社会リスクが増えることも視野に入れて考える必要がある。
 - 3) 再生可能エネルギーの活用を決して否定するものではないが、エネルギーを考えるに当たり EPR (Energy Profit Ratio) が重要指標である。再生可能エネルギーはエネルギー密度が低く、且つ不確定エネルギーであるため結局バックアップ電源が必要になって2重投資が避けられない。一方、原子力エネルギーはエネルギー密度が凡そ100万倍も大きいためEPRが大きいけど事故による影響も大きい。要するにハイリスクハイリターンである。広い視野を持ってエネルギー選択をするべきで、怖いとの感情に流されてゆく方が怖いということを知る必要がある。
 - 4) シェールガス・オイルも大量にはあるが、在来型のガス・オイルに比べてEPRは相当低くなっており、救世主と受け取るのは時期尚早であろう。
 - 5) エネルギー開発は一朝一夕でできるものではなく国家戦略として長期にかけて高い視座に立って行うものであり、一時の風潮に流されるべきではない。
- 以上のような議論を踏まえてグループ発表を行い、非常に良い出来栄の発表となったことは喜ばしい限りである。 以 上

<グループE エネルギー教育の在り方> 報告者：三谷信次

1. 参加者

(学生) 浅野竜也、伊藤唯、井上太貴、川島寛之、坂本颯希

(教員) 遠西昭壽(愛教大特別教授)(SNW) 若杉和彦、三谷信次

(オブザーバー) 牧村 貴史 (中部電力)

2. 討論、対話の要旨

グループEは浅野君が学生達の進行リーダーを務め、坂本さんが書記役、発表は浅野君と伊藤さんが行った。さすが愛知教育大学の学生さんだけあって、エネルギーに対する洞察力、表現能力、中等教育に対する問題意識、飛び交う議論を迅速・適格にまとめ上げる能力等々、どれをとってもこれまで自分が経験した対話会の中で最も優れたコミュニケーションとまとめ能力をもった学生達ではないかと感じた程である。彼らが短時間の対話の中でまとめたグループEのスライドを見れば、すべてはそのことがよくわかる。

子供たちにエネルギーのことを教えるに際して、事実を基にして子ども達に問題意識を持たせた上でよく考えさせて、自身の言葉で意見が述べられるところまで指導しようとしていることがわかる。子供たちの間で話を深めてゆき、互いに他の意見を認め合って意見を出させ合意に達するプロセスを形成するというリスクコミュニケーションの基本原則の知識を習得してしまっている。数年前に欧米のエネルギー教育の実情を一部調査して一歩も二歩も我が国が遅れていることを痛感したことがあるが、愛教大の学生達はすでにそれらの教育を取り込んで教わっているふしがある。スライドに書かれている内容は、数時間程度シニアと対話したくらいで表現できるものではない。これは吉田先生を始めとする愛教大の教授陣の欧米の先端のエネルギー教育導入の成果ではなかろうかと思ったりする。

4%の我が国エネルギー自給率から議論が出発して、お決まりの我が国エネルギーの選択肢に話が及んだ。学生達の側で教材として所望されたので、エネルギー選択肢ごとのCO₂排出量、コスト比較、EPRなどを棒グラフで表したコピーを幾つか提供した。シニアの側はお返しに子供たちとの接し方、話し方などの技法について対話を通して教わったりした。以上

5. グループ発表に対する講評とシニアからの挨拶

<吉田先生の講評>

嘗ての昭和30年代初期の日本は水力30%、火力70%という時代もあった。この頃の生活は電気を中心振り返ると、電球とラジオ。昭和40年代に入り、高度成長期が訪れると、洗濯機、クーラー、テレビが日本の隅々に普及した。このように、エネルギーは時代とともに変わるもの。

従って、将来どのようなエネルギーが日本にとって一番相応しいかを考えることが大切。本日の対話会の発表を聞くと、「考える力を涵養する教育が必要である」こと、即ち、「その基礎力と考える能力をいかに培うか」ということを教育の場で実践すべきであることを深く理解してくれたものと確信する。

＜シニア代表山崎氏の挨拶＞

本日は返上でこのような中身の濃い立派な企画をされ、又、シニアにお手伝いさせていただく機会を頂いたことに感謝したい。本日の講演資料には貴重な最新データが詰まっているので是非活用していただきたい。

グループ討議を聞いた感想は、学生の皆さんが将来の教育者としての自覚と意欲が本物であり、原子力エネルギーのリスクと便益や放射線についてよく理解していることが伝わってきた。我が国は、経済的繁栄の持続と科学技術立国としての立ち位置を鮮明にしており、エネルギーについてこれから子供達がしっかり考えることが出来るような教育的環境がますます必要になる。教壇に立つ皆さんの役割はますます重要です。今後の皆さんの健闘と発展を祈っております。

6. シニア参加者の感想（順不同）

＜齋藤伸三＞

基調講演に関して、予め、吉田先生より、今回は、学生は原子力発電の仕組み、放射線の基礎はある程度理解しているので、放射線被曝が与える影響、原子力発電利用の有無の産業や経済への影響、エネルギー資源の確保と原子力政策及び将来の人口減少と産業・経済、世界における地位の予測等を話して欲しいとのご要望を戴いた。後段は難しいところであるが、ご趣旨に沿うよう資料を整えたので膨大なものとなり、これらについて限られた時間で話しても学生さんがどこまで理解出来るか不安はあったが、今後、更に勉強する際に思い出し、役立てて貰えればと願っている。

学生との対話は、Bグループ「原子力発電のもつ可能性とリスク管理」に参加したが、学生4人中2人は昨年に引き続き2度目の参加であることを知り、それだけ、関心が高く、評価されているのであれば喜ばしいことと感じた。課題については基調講演でも述べたので幅広く議論し、リスクに関しても単なる事故の発生確率や放射線被曝に限らず、エネルギーの安定供給、産業の空洞化、雇用の喪失等のリスクについて対話することが出来た。グループ発表の際には、最初の自己紹介で原子力に反対と明言していた学生が、その必要性を理解したのも一つの成果であったと思う。総じて、原子力、エネルギー問題に関し、正しい知識を身につけ、理性と見識を持って生徒を教育していきたいと受け取ってくれたことは喜ばしく、頼もしく感じ、彼らの将来に期待をしたい。

なお、Bグループには、原子力を良く勉強され、毎年参加されている羽澄大介教諭（小学校に異動）が参加され、後輩に適宜アドバイスもされ、より密度の濃い対話に助力を戴いた。しかし、教員の現場では、日教組が反原子力の参議院議員候補者を推薦し猛烈な選挙活動が展開されている実情も聞かされ、教育

委員会も含めた改革が望まれるところである。

<山崎吉秀>

まず、冒頭の齋藤さんの基調講演ですが、歴大な資料、データに基づく格調高い内容でしたが、限られた時間の中でのこと特に福島発電所での事故の様子など、学生には消化不良の部分もあると思います。学生にはこれからもこの資料を参考にしながら、今一度復習をして貰えたらと。そしてその過程で疑問も出てくれば、何なりとシニアネットに問い返して下さればと思います。

対話の中で、その後の発表の中で本当に心強く感じたことは、さすがに先生を志しておられるだけに、事実関係をしっかりと理解、把握して無いと子供達には教えられない。そして教えたことによって、子供達にその知識から自らが取捨選択が出来る能力を身につけさせることが何よりといった共通理念を、学生達の皆さんに感じさせられたことでした。これは正に上に立つ先生方の見識がそうさせていると拝察。

エネルギー問題そのものについては、短時間の会話の中では伝わりきって無い点、あちこちに見えましたが、これは先にも触れましたが基調講演の資料のなかにも貴重な情報が含まれていますから、これも利用しながらブラッシュアップして下さればと。そして客観的な、正しい情報を子供達に！！我が国の将来は理系の先生方の教育に大きくかかっている。

<寺澤倫孝>

昨年のこの大学での対話会でも感じたが、参加している学生の皆さんが原子力の問題を真剣に考えようとする強い熱意をもっていることに驚かされるとともに好感を持てた。その強いインセンティブを与えているものは何かを考えさせられる。将来、小・中学あるいは高等学校の教師として理科教育に携わり、いま国家的な大問題になっている日本のエネルギーの課題にどのように対峙するかとの意識も強いだろう。最近ややもすると自分の将来像を描けない若者が多いと聞くこともしばしばであるが、将来の自分たちの問題を重視し、それを次世代にどのように伝え、教えていったらいいかと考える若者がいることを快く思う。そのような雰囲気醸し出す環境をこの大学は準備しているに違いない。

愛知教育大学では今年、吉田教授の研究室が「エネルギー環境教育フォーラム 2013」を企画し、第1回講演会「放射線に関するワークショップ」、第2回 SNW シニアとの対話「原子力発電所問題・放射線と教育」、第3回浜岡原子力発電所見学を実施するという。今回の対話会はこのプログラムのひとつであるが、充実した企画をすすめる原子力技術を支援してくれる組織があることはありがたいことである。

学生たちも現在の原子力の実情、ジャーナリズムによる批評、市民の感情的な批判に心を動かされ、不安を少なからず持っていることは対話のなかでも感じられる。SNWの対話会も回を重ね地道な活動を続けていくことの重要性を強く感じる。若者たちに対する対話に加えて、一般市民に対しても放射線への異常な反応、原子力に対する不信感を考え直してもらう活動は重要である。かつて経産省の資源・エネルギー庁は原子力有識者を認定し、地方の市民講座などでPR活動を展開していた。私も数回参加したがきわめて有意義な試みだったと回想している。この制度は福島事故以降廃止されてしまった。残念なことである。

<中村威>

今回が2度目の教育大学での対話会でしたが、日曜日であり、また学生たちにとっては来週からの教員実習を目前に控えての対話会大変だったと思います。事故から2年以上がたち、少し一時のような不安を助長するような報道も影をひそめ、落ち着いた雰囲気の中での対話であったのではと思います。福島の事故を風化させず、より安全な原子力にしていくことが我々の務めと考えておりますが、いまだに残る放射能、放射線についての不安は身体的影響という直接の問題でもあり、これをいかに正しく理解するかということは重要なポイントであろうと思います。Cグループでは放射線とその利用についての対話を行いました。これから教壇に立つ彼らにとって正しく知識を学ぶとともに、将来の我が国はどんな国になるのかを考え、小中学生を教育していってほしいものだと感じました。

また、懇親会などの場においても現役の先生からも理科教育の、特に原子力、放射線という科学的教育の内容、時間的な問題など悩んでいる現状に触れることができたのも収穫でありました。

<若杉和彦>

グループEに参加し、「中学校理科でエネルギー教育はどこまで可能か」をテーマに学生と対話した。学生側の態度はみな真剣で、テーマどおり子供達にどのように教えていくかを勉強しようとする熱意に溢れていた。ただ、今までの世論やマスコミ等の影響が学生にも及んでいるようで、事前に行われた基調講演からの知識とのはざままで、「どちらが本当なのか？正直分からない。」が対話開始時の学生の思いであったようだ。しかし、学生からの質問、「エネルギーをどう子供に教えるか？」、「福島事故で原発電力がなくなったところの穴埋めを新エネルギーで可能なのか？」、「食品汚染の基準はどのように決めたのか？」、「放射線を理解してもらうにはどうすればいいか？」等々につい

てシニアと対話を重ねるにつれて、原子力の有用性や放射線の安全性についてかなり理解が進んだように感じた。最後の学生発表では、感情に左右されず子供達に事実を教えることが重要等と一定の成果が表れていたように感じた。特に愛教大の吉田先生は、学生・教員を対象に対話会や原子力施設見学等を毎年企画し、将来必要なエネルギー・原子力教育の実践に努力しておられ、心から敬意を表したい。

日曜日にも拘わらず、現役の先生方も熱心に基調講演を聴講され、対話にも参加された。是非正確な事実と科学知識を教育現場で活用されることを望む。中原懇の玉越様には毎回裏方で対話会を盛り上げていただき、心から感謝申し上げます。

<三谷信次>

グループEのテーマは、「中学校理科でエネルギー教育はどこまで可能か？—具体的な授業プランと用いる教材について—」であった。対話の最初で、このテーマについてシニアは教員ではないので「具体的な授業プラン」など持ち合わせていないと申し上げたが、学生達の方からそれぞれ討議する議題が出てきた。M2の浅野君など何人かはすでに中学校で出前授業を経験しており、PTAの牧村さんとは、中部電力の出前授業とかみ合うところがあった。指南役の遠西先生は、当初原子力に批判的な立場で話を進められ、シニアと二者だけの議論になることがあった。これには、学生達もただただ聞き入るしかない状況が時々あった。その後の対話で「エネルギー問題の解は一つとは限らない」「教師が課題を与えて子供たちに考えさせる」「科学的に正しいことはしっかり教育する」「物事の判断は、科学だけでは決まらないことがある（理科教育というより総合教育）」などを話し合った。「原子力は将来いずれ無くさなければならない」と主張していた遠西先生も、議論の終わりころには、「今の原発はなくなっても、将来それに代わるエネルギーとしての原子力利用は認めざるを得ない」というところまで譲歩された。学生達もこの議論を聞いていて多くの得るものがあったと思う。SNWの対話会というものは、シニアと学生達との定例的な対話だけでなく、シニアと批判的意見の先生を交えた対話も時には、学生達にとって刺激になるのではないかと思う。

<大野崇>

今回初めて対話 in 愛知教育大学に参加した。まず思ったことは、日曜日かつ来週からの教員実習を目前に控えているにも関わらず21名もの学生が参加し、現職の教員の方も2名参加されたことは、本対話に関する吉田先生の強い関心と指導力である。それと、学生の素直さと真面目さ、その中であって質の高さ

と姿勢の良さに、伝統ある教育の学び舎との印象を持った。また、対話会及び懇親会などの場を通し現役の先生から理科教育の、特に原子力、放射線という科学的教育の内容、時間的な問題など悩んでいる現状に触れることができたのも得難い経験であった。

B グループの「原子力のもつ可能性とリスク（管理）」に参加したが、質問の内容から、学生は原子力に対しこれまで漠然としたものしかもっていなかったものが、内容に富んだ基調講演と対話を通し身近に感じてもらえたなどの印象を強くした。また、今回、羽澄先生が現場の経験を後輩に伝える機会にもなり、先生に参加いただけたことは、対話を一層内容濃いものにしたと思う。今年度から放射線教育が開始されたので正しい知識を普及して行ってもらいたいことを切に願うものである。

<早野睦彦>

昨今の原子力問題やエネルギー問題について、現在の学生たちと直に対話することも楽しいですが、さらにその次の世代に伝えるには将来の教員の卵である教育大の学生たちと対話することでもう一世代分の拡がりを感じられると思って今回の対話会に期待して参加しました。

アンケートを取り纏めてみたところ、案に相違せず皆さんほぼ教員志望であることがわかり、将来生徒にどのように原子力問題、エネルギー問題を伝えていこうかとの具体的な問題意識が明確で、参加の目的がはっきりしていて私にとって非常に価値ある対話会となりました。

担当のDグループでは「エネルギーの未来・再生可能エネルギーの可能性・将来の技術開発可能性」について語り合いました。内容は対話概要に記載しましたが、皆さん非常に素直な質問が多く、Dグループと一緒に加わった熱田高校の天津先生からもサポート的な説明があつて対話の結論もまとめやすかったようです。グループ発表の内容も適切で、シニアからの質問にも的確な回答ができていました。

原子力技術に対して批判的な遠西先生のような方がグループに入っていたら、それはそれでまた異なった価値ある展開になっただろうと考える次第です。

<針山日出夫>

今年の愛知教育大学での学生・シニアの対話会は吉田先生の熱意と中部原子力懇談会の玉越様のご支援の御蔭で、達成感に満ちたイベントとなり、ご両人に感謝したい。

吉田先生のエネルギー問題に対するご見識や教師を目指す学生達に対する暖かい眼差しと的確な指導にはいつも頭が下がります。その上で、先生の日頃の

ご指導・ご尽力と学生達の真摯な姿勢/教師を目指すものとしての自覚が相俟って実りある対話会が出来たものと思います。

クロージングリマークで先生が示唆された『日本の将来、これからのエネルギーの在り方などを自分の頭で考えることの出来る力を涵養する教育を目指せ』とのご趣旨のお言葉に新鮮な感銘を受けました。

<西郷正雄>

今回の愛知教育大への参加は、確か2年前の参加以来である。吉田先生や中部原子力懇談会の玉越様の細かな段取りにより、対話会は非常にスムーズ進められた。また、グループでの対話会では、学生が積極的に質問をされるので、会話もおのずと弾んだ。ただ、一部の学生が聞く側に回っていたために、全員に質問をしてもらうよう誘導して発言してもらった。その結果、学生の方々も一応聞きたいことを聞くことができたのではないかと思う。それは、発表用のプレゼン資料が、あまりにも立派にまとめられていたことより伺えられる。それにわずかな時間の中に、10枚ものの資料に整理しているのには驚きであった。また、これから教師を目指す上において、自らが選んだ理科教育の重要性をエネルギー・原子力という視点より、やりがいのあるものへと繋げられていたので、この対話会が成果あるものになったのではないかと考えています。

以上